

【米一般教書】「北の脅威訴え韓国にくぎ」 拓殖大海外事情研究所の川上高司所長の談話

<http://www.sankei.com/world/print/180131/wor1801310053-c.html>

(産経新聞 2018.1.31)

本来は米国内向けの一般教書演説で、かなりの部分を北朝鮮問題について言及した意味は大きい。北朝鮮に昏睡状態で解放されて帰国直後に死亡したオットー・ワームビアさんの両親や脱北者を会場に呼び、核・ミサイル開発など北の脅威について訴えた。

平昌五輪を前に融和ムードで北の戦略に乗りそうな韓国に強くくぎを刺す形となった。また朝鮮半島が一気に南北対話に向かい、やがて中国寄りの対話路線に進むことに危惧を持ったのだろう。北主導にはさせないと警告する意味もある。

核に対して断固たる抑止力を効かせながら、北に対しては核保有を認めさせないという、強いメッセージで、これは中国に対するものでもある。

中国に対しては「脅威」とまでは言わず、「ライバル」と述べるにとどめた。これは中国に対北朝鮮で影響力を行使してほしいという意図があるとみられる。

演説からは愛国心に訴える印象を受けたが、11月の中間選挙に向けて「頑張るぞ」と共和党議員らに訴えているようだった。米経済が好調で、米国土を脅かす敵に力強く立ち向かう姿勢を1年である程度達成し、トランプ氏は中間選挙の先の2期目を意識し始めたようにみえる。

ロシアの米大統領選干渉疑惑で追い詰められているが、共和党内では追及が行き過ぎとの声もある。同党内で「2期目もトランプで行こう」というコンセンサスが出来上がっているのではないかと

(聞き手 岡田美月)